

夏播用極早生エンバク新品種の利用方法

○我有 満・桂 真昭¹⁾・山下 浩・高井智之

(九州沖縄農研・¹⁾農林水産技術会議事務局)

【目的】

1980年代から広がったエンバクの夏播栽培に対し、低温要求性が小さく、年内収穫可能な極早生の耐倒伏性品種の育成を行ってきた。この間に6品種が登録され、ラインナップ化が進んでいる。九州沖縄農研育成のこれらの品種は、他品種より総じて出穂迄日数が少なく、耐倒伏性が強い。そのため、夏播栽培における倒伏や出穂の遅れによる収量減のリスクが小さく、晩秋の草量確保に対する安定度が高い新しいタイプの品種群と言える。また、「たちいぶき」はサツマイモネコブセンチュウ抑制効果が認められ、飼料利用以外の新しい利用場面が想定されるようになった。ここでは、夏播用新品種を用いた新しいエンバクの利用方法、特に、エンバクとイタリアンライグラスの混播利用および緑肥・クリーニグクロップとしての利用について紹介したい。

【材料および方法】

「はえいぶき」(1996年登録、以下同様)、「たちいぶき」(2000年)、「たちあかね」(2005年)、「九州14号」「九州15号」「九州16号」(以上2008年)の品種登録の試験データおよび逐次行ってきた栽培試験、品種比較試験およびサツマイモセンチュウ抑制効果試験等のデータを引用した。

【結果および考察】

従来の夏播栽培における播種限界は、9月中旬とされており、それ以降の播種では年内の収量確保が難しい状況であった。そのため、9月下旬以降が播種適期であるイタリアンライグラスと夏播エンバクとの混播は行われていなかった。「九州14号」および「九州15号」は、出穂迄日数が少なく、10月上旬播種で年内に出穂し、収量が確保できる。「九州14号」「九州15号」とイタリアンライグラス「エース」との混播は、イタリアンライグラス単播と比較して、1番草における増収効果がみられ、2番草以降におけるイタリアンライグラスに対する生育抑制は認められなかった。夏播エンバクとイタリアンライグラスの混播により、晩秋の草量確保と冬作の総収量の向上が期待できる。サツマイモネコブセンチュウ抑制効果を有する「たちいぶき」を前作とすることで、サツマイモの収量が増加することが確認された。現状で抑制効果のあるエンバク品種は「たちいぶき」のみである。また、サツマイモネコブセンチュウ抑制効果を持つ冬作物が見あたらない中で、「たちいぶき」はサツマイモ等のサツマイモネコブセンチュウが問題となる夏作物と輪作も可能であることから、当面、注目に値する。

表1. エンバク極早生品種の夏播き栽培における試験成績(九州沖縄農研、2003年から2005年の平均値)

品種名	発芽良否 1:極不良 ~9:極良	初期生育 1:極不良 ~9:極良	出穂まで 日数 日	収穫時の		草丈 cm	乾物率 %	乾物収量 kg/a	穂重割合 %
				倒伏程度 1:無~ 9:甚	病害程度 1:無・微 ~9:甚				
九州14号	7.7	6.4	39	3.2	2.1	105	23.4	64.2	28.8
九州15号	6.9	5.9	39	2.2	2.5	93	24.1	61.6	31.6
はえいぶき	7.3	5.9	42	3.4	3.0	108	21.0	67.1	25.2
九州16号	6.9	5.7	44	2.3	2.0	101	20.6	64.0	21.0
スーパーハヤテ集	6.7	5.6	47	3.4	2.9	120	20.6	75.5	21.7
サビツヨシ	7.2	5.3	49	3.1	2.9	106	17.1	64.2	12.3
スピードスワロー	7.3	5.1	49	3.6	2.9	111	17.1	69.5	11.9
たちあかね	7.5	5.8	50	3.1	2.4	105	18.9	64.4	19.3
たちいぶき	7.3	5.4	50	3.4	3.0	105	20.1	72.4	19.1
ウエスト	7.4	5.3	50	3.6	3.0	112	17.0	76.3	13.0
極早生スプリンター	6.8	4.9	55	3.3	2.8	118	15.9	70.2	10.1
エンダックス	4.7	4.7	58	3.4	2.6	121	15.3	63.5	6.0
アーリークィーン	7.1	5.2	61	3.6	2.9	116	13.7	64.1	2.1

注)2003年から2005年の播種日は順に、9/2、9/6、9/9で、刈り取り日は、12/9、12/8、12/12である。